

## 〔講演録〕 吟じながら独り行き―郁達夫の名古屋に在りし日々

高文軍

### 一、 郁達夫と名古屋、そして名古屋大学

郁達夫（本名郁文。一八九六一―一九四五）は、日本留学経験のある中国人作家である。彼は、一九一三年（大正二年）に来日、神田正則学校で学んだ後、第一高等学校予科に合格し高等学校への進学準備を行った。その翌年には、名古屋の第八高等学校第三部（医科）に入ることとなった。

一九一五年（大正四年）、郁達夫が留学生として名古屋にきた。当時の名古屋は、人口三七万人、面積は三一・九八ヘクタールであった。第八高等学校は、名古屋市外の愛知郡呼続町に位置していた。

郁達夫が留学した旧制第八高等学校は、一九〇八年三月に設立された。一九四五年の空襲により校舎の殆どを焼失して

しまい、現在は建物が残らない。一九四九年五月、学制の変更により、新制名古屋大学の教養部の構成母体となった。一九五〇年三月、学制改革により閉校し、四十二年間の歴史に終止符を打った。

日本における代表的な郁達夫研究のきっかけも、またゆかりのある名古屋にあった。一九五七年十月十九・二十日、当時まだ名古屋城の城内にあった名古屋大学で、日本中国学会大会が開催された際、当時名古屋大学文学部講師であった前野直彬の紹介で、伊藤虎丸・稲葉昭二両氏が、はじめて郁達夫資料の整理を協力して進めることとなった。この調査作業は、一九六九年の刊行から、全五冊にも上った『郁達夫資料』（東京大学東洋文化研究所東洋学文献センター叢刊）の原点と

なったのである。

一九九八年六月三十日、八高創立九十年記念祭の際には、八高会により、名古屋大学東山キャンパス豊田講堂の側に「郁達夫文学碑」が建てられた。

本年（二〇一五年）は、郁達夫が八高に入学して百年にあたる年であり、改めて、名古屋留学時の郁達夫の軌跡についてふりかえりたい。

## 二、郁達夫―その青春の足跡

### 二、一 留学当時の環境―「沈淪」を中心に

#### (1) 当時の名古屋郊外の田園風景

前述したように、八高は名古屋市外に位置していた。周囲にはのどかな田園風景が広がっていた。一九二一年に名古屋での体験をもとに書かれた小説「沈淪」では、主人公「彼」の前途への希望は、名古屋到着一日目の夜から、眼前に広がる景色によってくじかれた。

……いまN市の田舎に来てからというものの、彼の下宿は孤立した一軒家で、四方どこにも隣家はなく、左手の

門の外は往来で、前後はみな田圃、西側は溜め池、そのうえ学校が始まるまでは他の学生も来ないので、この広い下宿に客は彼一人であった。（中略）窓外の梧桐の木は、わずかな風にもざわざわ音をたてる。二階に住んでいたので、梧桐の葉音は彼の耳に近かった。彼は恐ろしさのあまり、泣き出さんばかりになった。都会への郷愁 (Nostalgia) をそのときほど激しく感じたことはない。

―「沈淪」<sup>(1)</sup>

ここで描写されている溜め池とは、現実には郁達夫の下宿すぐ側にあった広見ヶ池のことであり、二万五千九百八十七坪もの広大な面積を有していた。<sup>(2)</sup> このような侘しい人里離れた田舎暮らしは、着いたばかりの「彼」に大きな心理的影響を与えた。

一方、住み慣れてくると、同じ景色でも、見え方は変わってくる。ノイローゼになり梅林（後述）に転居したのち、郁達夫は再び広見ヶ池の近くに下宿した。一九一六年九月兄に宛てた手紙では、まったく正反対の描写がみえる。

私の部屋は二階で、南は広見ヶ池に面していて、池の水はきれいで静まり返っており、秋の月見は西湖に劣るものではありません。東の方は遥かに八事山興正寺を眺

めることができ、松や杉の緑が黄色の茅葺き屋根と映じ  
合い、小春日和にはいつも農夫や牧夫がその間を往来す  
るのが見られます。

—『郁達夫伝』兄郁曼陀への手紙より<sup>(3)</sup>

地理的な要素は、若き留學生に対する影響は大きかっただ  
ろうとはいえ、同じ環境に住んでいて眼に映る物が時によつ  
てこれほど違うというのは、豊かな感性の持ち主であり、郁  
達夫の精神構造の複雑さを垣間見ることができる。

このような郁達夫の感性の豊かさは、この時期に書いた一  
連の漢詩からも読み取ることができよう。四首を紹介する。<sup>(4)</sup>

村居雜詩五首（一九一五年〔大正四年〕）<sup>(5)</sup>

其三

残秋天氣最淒清	残秋の天氣 最も淒清
緩歩池塘夕照明	池塘を緩歩すれば夕照明らかなり
看到白雲歸岫後	看到す白雲の岫に歸るの後
衡陽過雁兩三声	衡陽の過雁 兩三声

其四

勞勞塵事幾時休  
勞勞たる塵事 幾時か休まん

溝水悠悠日夜流  
溝水悠悠として日夜流る

壟上秋風香稻熟  
壟上 秋風 香稻熟し

前人田地後人收  
前人の田地 後人収む

名古屋に来てから二ヶ月後に作られた詩の「残秋の天氣最  
も淒清」の句は、氣候も心情をも表現したもので、秋の寂し  
さが詩人の心情とぴったり一致していたことがうかがえる。  
全篇にある農村を喜ぶ心情は、この詩の主要な旋律となつて  
いる。

梅雨連朝不霽昨過溪南見秧已長矣二首其一

（梅雨連朝霽れず 昨 溪南を過ぐるに）

秧の已に長ずるを見る<sup>(6)</sup>

（一九一六年〔大正五年〕）

草滿池塘水滿汀	草は池塘に滿ち 水は汀に滿ち
江村五月雨冥冥	江村五月 雨冥冥たり
昨宵沽酒溪南去	昨宵 酒を溪南に沽いに行くに
遠見秧田一片青	遠く 秧田の一片の青きを見る

詩中の「江村五月」は、陰曆であり、太陽曆の六月梅雨の季  
節を指している。遠くを望めば、五月に植えられた稲が青々

と育つさまが目に入り、気持ちのよさを詠っている。

夜帰寓舎値微雨口占一絶

(夜寓舎に帰るに微雨に値う一絶を口占す)

一九一六年九月三日

湿雲遮路夜鳥飛

湿雲路を遮り夜鳥飛ぶ

瘦馬嘶風旅客帰

瘦馬風に嘶き旅客帰る

細雨小橋人独立

細雨小橋人独り立つ

三更灯影透林微

三更の灯影林を透かして微かなり

この詩は、兄郁曼陀に宛てた手紙の最後にしたためたものである。一年前の「村居」の詩に比べると、陰鬱な気分が大いに増している。郁達夫本人も、詩を手紙にしるしたあとに、「覚有鬼気」との評語をつけている。

このように、郁達夫の名古屋の住まいを詠んだ詩には、田園風景を楽しんでいるものと、何とも言えぬ侘しき溢れるものが混在し、小説「沈淪」に似た特徴が見て取れる。

(2) 学校

授業のときは、全クラスの学生にかこまれていながら、彼はいつも孤独であった。衆人の中で感じるこの孤独は、

一人静かな場所にいるときの孤独よりも、さらに耐えがたいものであった。学友たちはと見ると、それぞれ喜々として先生の講義に耳をかたむけている。ただ彼だけが、身は教場にありながら、心は浮雲のようにとりともめない空想に走るのであった。

やつのことで放課のベルが鳴る。先生が出て行くと、学友たちは互いに笑いあい、談じあい、春の小鳥のようにたわむれる。ただ彼だけが眉をしかめ、舌にはまるで千鈞の巨石でものしかかったように、黙りこくっている。彼とても学友たちが語りかけてくれるのを望んでいるのだが、学友たちはめいめい自らの楽しみに余念がなく、彼の不機嫌な顔をみると、誰もみな逃げ出してしまっているのである。そこで彼は、ますます学友たちを憎むようになった。

―「沈淪」

小説「沈淪」においては、学校はこのように苦痛に耐えがたい場所として描写されている。しかし、郁達夫を知る人々の追想では、彼は語学力抜群の温和・寡黙な文学青年で、教壇からも級友からも一目置かれる存在であった。

郁達夫の八高での同級生であった福田武雄(旧姓石谷)は、俳号を栖月という。一九七一年に本人の喜寿を記念して第二

句集『月光』を編んだ。その『月光』には「郁達夫を偲ぶ」の句が収められている。

月の露 唐国に良き友ありき

詩を談じ 広見ヶ池の月を見き

詩幾篇 洞庭の紅葉 西湖の月<sup>(9)</sup>

### (3) 梅林

小説「沈淪」では、主人公「彼」が下宿先の若い娘の入浴姿を覗き見、ばれたと思込んで、恥ずかしさのあまり下宿を出、彷徨ううちに「梅林」という場所に辿り着いた。

両側の高い崖のところを通り抜け、左手の斜面に目をやると、崖に隣接する山の斜面に垣垣があり、何軒かの茅屋をかこんでいた。茅屋の入口には「香雪海」と記した匾額がかかっていた。(中略)その曲がった道を北に向かつて斜面を頂まで登りつめると、まるで絵に描いたような平地が彼の眼前に展開した。この園は麓から斜面を通って山上にかけて広がり、いかにも幽雅なたたずまいであった。

頂上の平地の西側は千仞の絶壁で、向かいの絶壁と相對峙しており、その二つの絶壁の間に、いま彼が歩いて



写真5 だいき大喜梅林。『沈淪』第5章に描かれた梅林はことと推定される。写真の下に「晴雪園之景」という説明が見えるが、郁達夫にも「卜居晴雪園」と題する詩がある。

図1: 梅林

きた南北に通ずる道があった。(中略)花園には梅の古木が横たわっていた。芝生の南端、山上の平地がまさに南に向かつて下りようとする所に、梅林の由来を記した石碑がひとつ立っていた。

—「沈淪」

郁達夫は、一九一五年秋に名古屋にやってきたのち、神経衰弱に陥り、同年の冬、静かな場所を求めて、大喜梅林(現在の名古屋市瑞穂区田光町・大喜町一帯)の「晴雪園」に引越し、翌春まで住んでいた。小説「沈淪」に書かれた梅林こそが、大喜梅林であり、またの名を田光梅林といい、当時の名古屋の観光地でもあった。この梅林は、一九三九年の田光梅林遺跡・欠上貝塚の考古発掘調査によって、その姿を消した。後世の人々は、小説から当時の様子を伺い知ることができ

る。また、この梅林についても郁達夫は漢詩に詠み込んでいる。

晴雪園卜居(晴雪園に居を卜す)

(一九一六年(大正五年))<sup>(10)</sup>

元龍好抛胡床臥 元龍好んで胡床に抛りて臥し

徐福真成物外遊 徐福 真に物外の遊を成す

望去河山能小魯 河山を望去すれば能く魯を小とし

夜来風雨似行舟 夜来の風雨舟を行るに似たり

月明梅影人同瘦 月明 梅影 人同に瘦せ

日夕潮声海倒流す 日夕 潮声 海 倒流す

猛憶故園寥落甚 猛しく憶う 故園の寥落の甚だしきを

煙花繚乱怯登樓 煙花繚乱たりて樓に登るを怯ゆ

元龍は、後漢の武將陳登の字。許汜が訪れたとき、陳登は寝台に横たわったままであったという故事と、自分が晴雪園で横たわっている姿を重ね合わせている。

徐福は、秦の始皇帝が不老長生の薬を求め、東の海へ旅立たせた方士であり、日本に渡来したとの伝説があるために引き合いに出したのである。

三句目の「小魯」は、『孟子』尽心上にみえる、孔子が東の山に登り、魯の国を小さいものとみなしたという故事にちなみ、自らが望む景色の広さを表現している。

「沈淪」には、梅林の他にも、当時の名古屋港、南陽館など嘗ての名勝地についても描写があり、名古屋の貴重な歴史記録としての側面も有している。



写真6 南陽館。名古屋市東区津田にあった。『沈淪』第七章に描かれた料理屋は左手林の中の瓦ぶきの建物と推定される。

図2: 南陽館

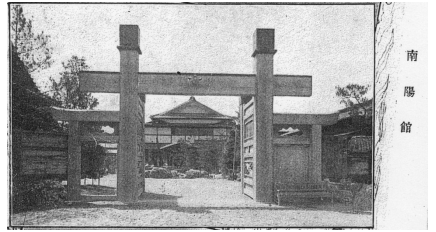


図3: 南陽館門

終戦後に、中国文学研究者の何人かが、「沈淪」を名古屋との関係から紹介している。

〔「沈淪」の〕筆はきわめて幼く、周氏（作人）にならって賞揚するほどの作品ではないのだがここにみなぎる悲痛な弱小意識は、今日のわれわれの笑ってすこせぬものである。ともあれ、この中国新文学初期のメルクマールともいべき作品が名古屋から生まれたということとは、名古屋の人にとって記憶すべきことであろう。

岡崎俊夫「郁達夫と名古屋」（上・下）『中京新聞』

一九四七年八月三・四日掲載

松江という町は小泉八雲によって世界に知られているといっても過言ではないが、同じように外国の文学者により、名古屋の町が外国に紹介せられたという例はどんなものであろうか。欧米人のことはいざ知らず、わたしの見ている範囲内からいうと、たった一人ある。それは八高に留学していた中国の作家郁達夫である。

近藤春雄「名古屋と中国作家」『中部日本新聞・夕刊』

一九五〇年七月十二日掲載

二、二「遠く 更に遠く」―「沈淪」を離れて

名古屋在住の四年間、郁達夫は積極的に名古屋近郊及び周辺各地に足をのびし、日本の自然山水及び人文的な景観に親しみ、感じたものを漢詩で詠み込んだ。彼は、その漢詩を学校の雑誌（八高『校友会雑誌』）や地方の新聞（『新愛知』など）に投稿をはじめた。彼が一生涯に創った漢詩五百九十二首のうち、約五分の二を占める二百二十九首は、この名古屋滞在の四年間に詠んだものなのである。

その一部を紹介する。

中秋夜中村公園賞月兼弔豊臣氏

（中秋の夜中村公園にて月を賞<sup>め</sup>で兼<sup>ね</sup>て豊臣氏を弔<sup>とぶら</sup>う）

社鼓村謡処処同 社鼓村謡処処同じく  
旗亭歌板舞衣風 旗亭の歌板舞衣の風

原注Ⅱ是の日よまな適々祭日に逢う。紅花旗鼓一時の盛を極む

薄寒天氣秋剛半 薄寒の天氣秋剛し半ばなり

病酒情懷月正中 病酒の情懷月正に中す

廢圃而今鳴蟋蟀 廢圃而今蟋蟀鳴き

虛堂自昔産英雄 虛堂昔より英雄を産む

原注Ⅱ園は豊臣秀吉の出生地為り。日人<sup>おのずか</sup>之を崇めて祀る

由来弔古多餘慨 由来古えを弔うに餘慨多し

賦到滄桑句自工 滄桑を賦し到りて句自ら工みなり

一九一五年九月二十三日 日本

この詩は、郁達夫が名古屋に着いて間もなく作った詩である。中村公園は、郁達夫の住まいからは、名古屋市を横断しないとたどりつけない場所である。そんな中たどり着いた場所では、偶然にも秋祭りを行っており、その熱気が詩人の興趣をかきたてた。

翌年の春には、名古屋の北三十キロほどに位置する犬山に花見にでかけている。残念ながら、花見にはやや早く、まだ開花はしていなかったが、それでも詩人の情緒は、筆をとら

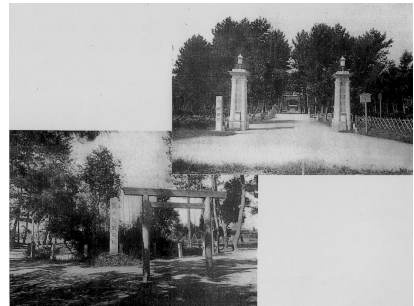


図 4: 中村公園

せ詩を作るにいたった。

犬山堤小歩見桜花未開口占二絶

(犬山堤にて小歩し桜花見るに未だ開かず二絶を口占す)

其一

尋春我愛著先鞭 春を尋ねて我先鞭を著くを愛し

梢上紅苞吐未全 梢上の紅き苞は吐きて未だ全きならず

一種銷魂誰解得 一種の銷魂誰か解し得ん

雲英三五破瓜前 雲英三五破瓜の前に





図 5: 犬山城

其二

帰帆森森擁雲煙

帰帆きはん森びよつびよとして雲煙うんえんを擁し

江上朝来霽色鮮

江上朝来さい霽色鮮さやかなり

東望浣溪南白帝

東かんげいに浣溪かんげいを望み南に白帝あり

此身疑已到西川

此の身こ已到こに西川せいせんに到るかと疑う

一九一六年四月 日本<sup>12</sup>

其一にある「三五」は、女子十五歳をいい、「雲英」は、唐代鍾陵の有名な歌姫の名であり、また唐代裴鉶の小説『傳奇・裴航』にも登場する若い女性の名前である。嫁入り前の少女と、花開く前の桜のつぼみのはつとさせる美しさを重ね合わ

せている。

其二の「西川」は、中国唐、宋時代の行政区分で、今の四川省中、西部の一部を指す。西川には、「浣花溪」「白帝城」があり、犬山城も別名「白帝城」と言われている。

その十日後には、郁達夫は興に乗じて一組の詩を作った。うち一首を紹介する。

由柳橋発車巡遊一宮犬山道上作 三首 其一

(柳橋由り発車して一宮犬山を巡遊する道上に作る)

田腔来往七香車

田腔でんしょう来往す七香車

宛曲西行路幾叉

宛曲して西行すること路幾叉

今日始知春気味

今日始めて知る春気の味

一宮四月祭桃花

一宮の四月桃花を祭る

一九一六年四月 日本

最後の一句に、地名も時間と巧みに数字を嵌め、当時の漢詩人らに激賞された。<sup>13</sup>

一九一八年(大正七年)三月、郁達夫は、伊勢・志摩方面に足を運んで、詩数首を作った。後にはこの体験をもとに小説「風鈴」を書いた。

その日彼は、雨上がり後に照りつける太陽の下で、除

しい岩石が突き立つ渓谷に沿って、珪石の交ざる土道の山路を歩き登り、温泉地旅館の紅葉館に着いた時はもうすでに午後の五時をすぎたころだった。

— 「風鈴」<sup>(14)</sup>

三月九日には、湯の山温泉に投宿した。漢詩には、湯の山温泉街の情景を一幅の山水画のように描きだしている。

宿湯山温泉（湯の山温泉に宿る）

峰巒都似緑雲鬢 峰巒都べて似たり緑の雲鬢  
一道清溪曲又弯 一道の清溪は曲り又た弯る  
日暮欲尋孤店宿 日暮れて孤店を尋ねて宿らんと欲し  
斜風細雨入湯山 斜めなる風細かなる雨湯の山に入る

一九一八年三月九日 日本<sup>(15)</sup>

翌日には、郁達夫はさらに南に位置する阿漕浦に足をのぼしている。郁達夫が留学していた時点で、阿漕浦は、海水浴場として開発されており、浜辺の松林は多くの観光客をひきつけていた。今はもう当時の面影をみることはできない。

過漕浦天忽放晴（漕浦を過ぎ天忽ち晴を放つ）

昨夜松仙庵裏宿 昨夜松仙庵の裏に宿り

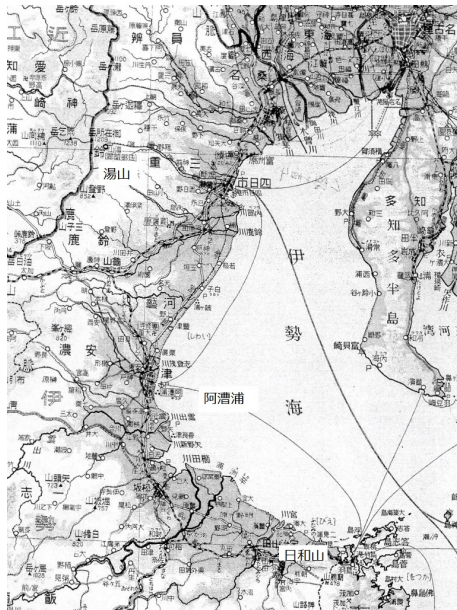


図 6: 伊勢志摩地図



図 7: 湯の山

今朝漕浦岸边行

彼蒼似亦憐吟客

開放南天半角晴

今朝漕浦の岸边を行く

彼蒼そらは亦た吟客を憐れむが似ごとく

開き放つ南天半角の晴

原注 松仙庵は乃ち湯山温泉の旅舎なり

一九一八年三月十日 日本

この詩では、投宿した宿を松仙庵としている。湯の山温泉には当時松仙庵という温泉旅館があったが、実際に泊まったのは、紅葉屋（望城閣）であったようである。詩の表現に、仙人の雰囲気を漂わせたいがために、また詩の平仄を整えるために、「松仙」の語を敢えて用いている。



図 8: 阿漕浦の松

郁達夫は阿漕浦を離れ、さらに南、伊勢湾観光の中心地である鳥羽にまで行き、日和山ひよりに登った。

登日和山口占一絶（日和山に登りて一絶を口占す）

伊勢湾頭水拍天 伊勢の湾頭水 天を拍ち

日和山下女如泉 日和山の下女 泉の如し

嬉春我学揚州杜 嬉春 我学ぶ揚州の杜

題尽西川十万箋 題を尽す西川十万箋

一九一八年三月十日 日本

日和山の上から、伊勢湾に賑わう（女性）観光客の姿を眺

めたのであろうか。揚州の杜とは、淮南節度使牛僧孺のもと揚州で書記を勤めた晩唐の詩人杜牧を指す。西川箋とは、唐代西川にいた著名な妓女薛濤が作った詩箋のこと。また、蘇軾には「恰似西川杜工部」の句があり、杜甫の多作を倣おうの意も含まれる。

その後、郁達夫は、翌月の春休みには京都嵐山や岐阜の養老山に足を運んでいる。

偕某某登嵐山へ又題登大悲閣聞友人情話有作

(某某と偕ともに嵐山に登る)

へ又題 大悲閣に登りて友人の情話を聞きて作有り

不怨開遲怨落遲 開遲を怨みず落遲を怨む

看花人正病相思 花を見る人正に病みて相思う

可憐逼近中年作 憐れむ可し逼近する中年の作

都是傷心小杜詩 都て是れ傷心なるは小杜の詩

煙景又当三月暮 煙景又た当る三月の暮

多情虚負五年知 多情虚しく負う五年の知

原注 〓某と訂交すること已に五載に及ぶ

嵐山倘有閑田地 嵐山倘なお有り閑かなる田地

願向叢林借一枝 願わくは叢林に向かいて一枝を借りん



図 9: 京都嵐山 大悲閣千光寺へと続く山道  
右側の石に「大悲閣道」と記している

養老山中作 (養老山中にて作る)

又是三春行樂日 又た是れ三春行樂の日

西園飛蓋夜遊 西の園に蓋を飛ばし夜遊す

携將孝子承歡酒 携え將ゆく孝子歡を承くるの酒

來上詞人醉月樓 來たり上る詞人月に酔うの樓

高嶺有峰皆北向 高き嶺は峰を有もちて皆北向す

清溪無水不南流 清き溪は水の南流せざるはなし

一九一八年四月三日 日本

題詩大得山靈助 詩を題するに大いに得たり山靈の助  
吟到更深興未収 吟じつつ更深こゝろきに到れども興未だ収ま  
らず

一九一八年四月 日本<sup>(16)</sup>

小説「沈淪」よりも何年か先行して書かれた多くの漢詩は、  
郁達夫の文学創作において重要な意味を持つ。郁達夫研究の  
先行者である稲葉昭二は、「このいわば修業時代の詩篇を知る  
ことにより、かれの内面の成長の様相を探ることが「沈淪」の  
理解をより深める一助ともなり、又後年小説から遊記に転じ  
ていったかれの道程の跡づけをより鮮明にし得ることにもな  
るう」と指摘する<sup>(17)</sup>。しかし、これまであまり重視されてこな  
かったのが現実である。文学者である郁達夫を全面的に理解  
するためにも、彼の日本文化との関わりについて、ひいては、  
日本の名勝地の詠み方について、改めて光を当てる意義が大  
いにあるだろう。

## 二、三 「半尋知己半尋春 五里東風十里塵」

―日本の文人との交流、友情

服部担風は、名高い漢詩人であり、『新愛知』漢詩欄の選評  
者であった。郁達夫が投稿した「犬山堤」の詩を担風が絶賛

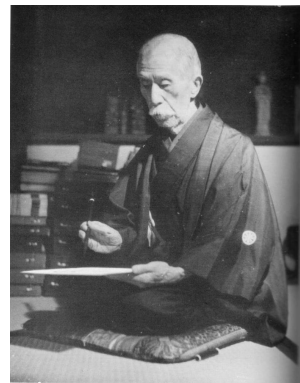


図 10: 服部担風像

したこともあり、一九一六年暮春、郁達夫ははじめて弥富の  
地へ行き、服部担風のもとを訪れた。  
帰つてのち、「訪担風先生道上偶成」の詩を書き、担風は次  
韻詩を作った。

郁達夫訪担風先生道上偶成

(担風先生を訪れ道のべに偶成<sup>たまたま</sup>)<sup>(18)</sup>

行尽西郊更向東 西郊を行き尽きして更に東に向かう

雲山遙望合還通 雲山遙かに望む合し還た通ずるを

過橋知入詞人里 橋を過ぎて詞人の里に入るを知る

到処村童説担風 到る処の村童担風を説く

服部担風 予有次韻詩録代評語 担風学人手批

(予に次韻詩有り録して評語に代う)

担風学人手づから批す)

弱冠欽君来海東 弱冠にして君が海東に来たるを欽し

相逢最喜語音通 相逢うて最も喜ぶ語音通ずるを

落花水榭春之暮 落花水榭春の暮

話自家風及国風 話は家風自り国風に及ぶ

その翌月、郁達夫は「日本謡」という七言絶句の連作を『新愛知』に投稿し、六月二十六日付けの紙面に掲載された。担風は「日本謡」について次のような評語をつけている。

郁君達夫留学吾邦猶未出一二年、而此方文物事情、幾乎無不精通焉。自非才識軼群、断断不能。日本謡諸作、奇想妙喻、信手拈出。絶無矮人觀場之憾、轉有長爪爬痒之快。一唱三歎、舌橋不下。

郁君達夫は吾が邦に留学してなお未だ一二年を出でず、しかして此の方の文物事情は、ほとんど精通せざるなし。自ら才識軼群に非ざれば、断断として能わず。日本謡の諸作は、奇想妙喻、手に信せて拈出す。絶えて矮人觀場の憾なく、転た長爪爬痒の快あり。一唱三歎、舌橋がり

て下らず。<sup>(19)</sup>

その後、二人は、漢詩のやりとりをしばらく続けた。一九一八年四月六日、郁達夫は再び担風のもとを訪れ、詩を作った。

郁達夫 重訪藍亭有贈 (重ねて藍亭を訪れ贈る有り)<sup>(20)</sup>

一向山陰訪戴来 一たび山陰に向いて戴を訪れ来たる

詞人居里正花開 詞人の居里正に花開く

去年今日題詩処 去年の今日詩を題せし処

記得清遊第二回 記し得たり清遊第二回

藍亭は担風の書齋名。詩の中では、晋の王子猷が雪の中戴逵を訪れた典故を用いて、自分と担風との友情が深いことをあらわしている。このときも担風は、次韻詩を作っている。

服部担風 四月六日郁達夫来過有詩即次其韻

(四月六日郁達夫来たり過ぐ詩有り即ち其の韻に次す)

禊橋村路客重来 禊橋村路 客重ねて来たる

紅葯紫藤随処開 紅葯紫藤 随処に開く

欲問江南詩句好 問わんと欲す江南の詩句の好きを

# 日本語（節録）



図 11: 日本語（節録）パネル



図 12: 禊橋

三生君是賀方回 三生君は是れ賀方回

禊橋は、担風の住まいの近くの川にかかっていた橋の名前であり、その橋柱の字は、担風の揮毫によったものである。この詩は、はるに客人が訪れた景色の美しさと喜ばしい気持ちを読み込むのみならず、郁達夫への高い評価が行われている。末尾の賀方回とは、宋の有名な詞人賀鑄を字で呼んだものであり、その詞風は、「幽素（ひっそりとして孤独）」でかつ「悲壯」であるとされている。担風は郁達夫のことを、賀方回が転生したのだと褒め称える。

前回の訪問と同様に、担風は、郁達夫を弥富の駅まで見送っ

た。感激した郁達夫は、それを七言律詩にあらわした。

辞祭花庵蒙藍亭遠送至旗亭上車後作此謝之

(祭花庵を辞するに藍亭の遠送を蒙つて旗亭に至る

車に上るの後此を作り之に謝す)

半尋知己半尋春 半ばは知己を尋ね半ばは春を尋ぬ

五里東風十里塵 五里は東風十里は塵

楊柳旗亭勞蟻屐 楊柳の旗亭に蟻屐を勞す

青山紅豆羨閑身 青山紅豆閑身を羨む

閉門覓句難除癩 門を閉ざして句を覓め癩除き難し

屈節論交別有真 節を屈して交りを論ずるは別して真有り

說項深恩何日報 項を説くの深き恩は何れの日にか報いん

仲宣猶是未婦人 仲宣は猶お是れ未だ婦らざるの人

祭花庵は、担風の書院の名であり、詩題中の藍亭は、書齋

名を用いて担風を指している。旗亭は、本来の意味は、酒樓

だが、ここでは、弥富駅前にあった「聚芳閣」という料理屋を

指すのではないかという。<sup>21)</sup> 担風はそこではしばしば詩会を行っ

ていた。

唐の楊敬之がいつでもどこでも項斯の詩才を褒め称えたよ

うに、担風は自分を評価してくれたとする。末句の仲宣は、

後漢末建安七子の一人王粲の字。王粲が戦乱で故郷に帰れな  
かった様を異国にいる自分に擬えている。

担風は、次韻詩一首を賦したあと、もう一首疊韻詩を作っ

た。この面会の時、郁達夫が、昨年中国に帰省したときのあ

れこれを語ったのに興味を湧いたことをしるす。

疊韻寄達夫 達夫為余說西湖之勝景詳

(疊韻して達夫に寄す

達夫余のために西湖の勝景を説くとこ詳らかなり)

公然放學賦嬉春 公然學を放ちて嬉春を賦す

襟被也追亭塵 襟被ぼてひまた追う亭塵の塵

崔護映紅尋故面 崔護は紅を映して故面を尋ね

樊川傷綠憶前身 樊川はんせんは綠を傷んで前身を憶う

煙波南浦程非遠 煙波南浦程みちのりは遠きに非ず

風月西湖話始真 風月西湖話始めて真なり

交態忘年久傾倒 交態は忘年久しく傾倒す

莫言瀛海絶無人 言う莫れ瀛海えいに絶えて人なしと

三・四句目はそれぞれ郁達夫を唐の詩人になぞらえている。

崔護には「去年の今日此の門の中、人面桃花双つながら紅を

映ず(去年今日此門中、人面桃花双映紅)」という句があり、



樊川（杜牧の字）が行く春を惜しんだ。この詩は、よりいっそう日本の文人の中国及び中国文化への賞賛と、郁達夫への称揚が読み取れる。

一九一九年、郁達夫は、八高卒業に伴い名古屋を離れることとなり、担風に別れの詩を寄せ、担風も留別の詩に次韻した。

服部担風送郁達夫文次其留別詩韻

（郁達夫文を送り其の留別の詩の韻に次す）

君去何之某在斯 君は去りて何にか之く某は斯に在り

青衿白首兩相知 青衿と白首と兩ながら相知る

春風不解繫離緒 春風は解せず離緒を繋ぐを

吹乱城中万柳絲 吹き乱す城中万柳の絲

担風は、また、別れ際梅花の絵を描き、詩をしるして郁達夫に贈った。この日中文人の友情と交流の象徴としての絵は、いま現在も郁の実家に保管されている。

郁達夫が、最後に担風に送った詩が次のものである。贈られた梅花の絵を詠み込む。

郁達夫 送担風（担風を送る）<sup>(22)</sup>

春風南浦黯銷魂 春風南浦黯として魂を銷す

写真13 担風書翰（部分） 大正八年五月十日付、八高卒業を目前にひかえた郁達夫の動静を伝えるもの。（角田勝岳宛）

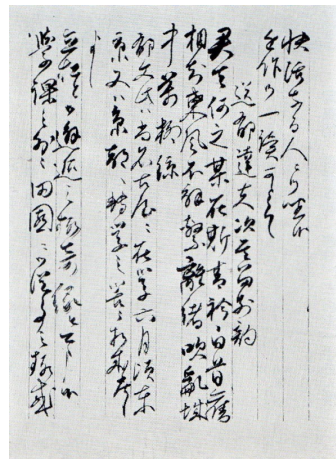


図 13: 担風書翰

話別来敲夜半門 別れを話らんと来たりて敲く夜半の門

贈我梅花清幾許 我に贈る梅花清きこと幾許ぞ

此生難報丈人恩 此の生報じ難し丈人の恩

一九一九年二月二十五日 日本

三、まとめ

郁達夫の名古屋留学時代については以下のようにまとめることができる。

一、「沈淪」は、郁達夫八高留学時代とイコールではない、また全てではない。

二、名古屋における四年間、郁達夫は日本の文化、日本の自然山水に親しみ、感受性が研ぎ澄まされ、その後の文学創作の礎を築いた。

三、元々の文人気質と詩人性により、精彩を放つ多くの漢詩（生涯に創作した約五分の二）をこの四年間に書き上げた。

四、服部担風をはじめ、日本の文人との交流が盛んに行われたことは、中国人留学生にあつて稀なことであり、魯迅と藤野先生との関係を越えたものと思われる。

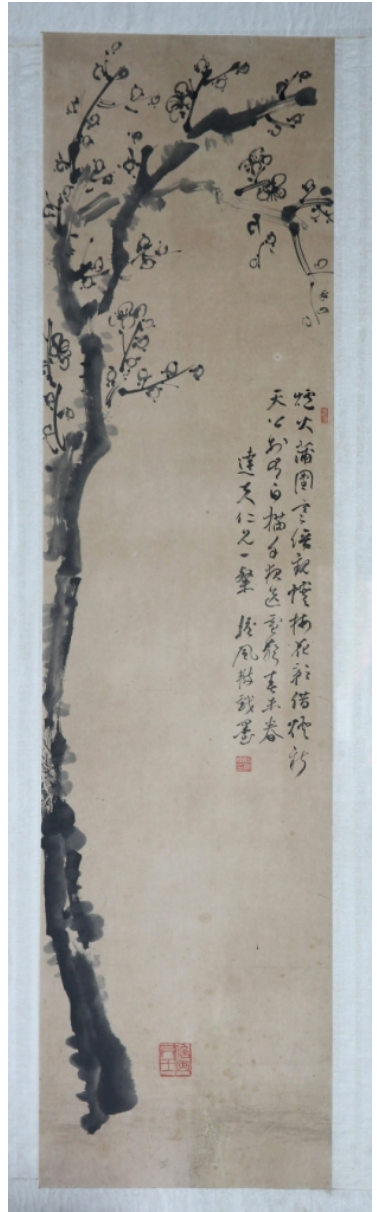


図 14: 服部担風絵

注

- (1) 引用の訳文は、『現代中国文学 六 郁達夫 曹禺』所収の「沈淪」（駒田信二・植田渥雄訳）河出書房新社、昭和四十六年十二月による。以下同じ。
- (2) 齊藤亮「郁達夫『沈淪』考―『名古屋の小説』覚え書（二）」（名古屋郷土文化会『郷土文化』第四一卷第二・三号、一九八六年十二月）による。
- (3) 稲葉昭二「郁達夫 その青春と詩」東方書店、一九八二年四月の訳による。
- (4) 本稿で紹介する漢詩の訓読は、服部担風との唱和詩をのぞき、私的に青木五郎に依頼し訓読してもらったのを元としている。
- (5) 『校友会雑誌』第十六号、第八高等学校校友会、大正四年十一月、「春江釣徒」の筆名で発表。
- (6) 一九一六年六月四日上海「神州日報・文芸俱樂部・文苑」掲載。
- (7) 一九一六年兄郁曼陀への手紙より。『郁達夫全集』浙江大学出版社二〇〇七年十一月。

(8) 曾谷道子「日本留学時代の郁達夫―八高・東大同期生よりの聞き書き―」(『魯迅研究』第三二号、一九六三年十月)による。

(9) 注(3) 前掲稲葉著、一九八頁。

(10) 注(5) 前掲雑誌、第十七号、大正五年五月。

(11) 注(5) 前掲雑誌、同号。

(12) 大正五年五月三日『新愛知』第八九一七号。これは、郁達夫初の地方新聞への投稿詩となる。

(13) 大正五年五月十四日『新愛知』第八九廿八号。注(3) 前掲稲葉著、一五〇頁。

(14) 「風鈴」は日本語訳なし。この訳文は、李香善による。

(15) 大正七年五月廿三日『新愛知』第九六四三三三号。次の詩も同号掲載。

(16) 大正七年四月十二日『新愛知』第九六二二二二号。訓読は稲葉昭二「郁文詩―第一高等学校時代―」(『龍谷大学論集』第三八九・三九〇合刊、一九六九年五月)による。

(17) 注(16) 前掲稲葉論文による。

(18) 大正五年六月十四日『新愛知』第八九五九号。服部担風と唱和した詩の訓読は、注(3) 前掲稲葉著にあるものを元にした。

(19) 「日本語」は、『校友会雑誌』第十九号、大正六年三月にも、評語つきで順不同で掲載された。評語の書き下し文は注(3) 前掲稲葉著を元にした。

(20) 大正七年五月廿二日『新愛知』第九六四二二二号。次の「辞祭花庵」も同号掲載。

(21) 稲葉昭二氏のご教示による。

(22) 唱和詩のうち、これのみ青木五郎の訓読による。

## 参考文献

\* 東洋学文献センター叢刊第18輯『郁達夫資料補篇(上)』東

京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、昭和四八

年三月

\* 稲葉昭二『郁達夫 その青春と詩』東方書店、一九八二年

四月

\* 高文君(軍)『且吟且嘯 斯人独行 郁達夫在名古屋』南京  
大学出版社、二〇一五年七月

## 図版目録

図1 梅林Ⅱ東洋学文献センター叢刊第18輯『郁達夫資料補篇

(上)』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、

昭和四八年三月

図2 南陽館Ⅱ東洋学文献センター叢刊第18輯『郁達夫資料補

篇(上)』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献セン

ター、昭和四八年三月

図3 南陽館門Ⅱ『名古屋案内』名古屋市役所、大正二年十一月

図4 中村公園Ⅱ『愛知県写真集』(愛知県大正二年『愛知県縣寫

真帖』の復刻版)ブックショップマイタウン、平成二三

年十二月

図5 犬山城Ⅱ『写真集 愛知百年』中日新聞社、昭和六一年十

一月

図6 伊勢志摩地図Ⅱ『日本地理風俗大系』第五巻、新光社、昭

和四年十月

図7 湯の山Ⅱ筆者撮影

図8 阿漕浦の松Ⅱ『津市民文化』第三期、津市教育委員会、  
二〇〇四年三月

図9 京都嵐山 大悲閣千光寺へ続く山道Ⅱ筆者撮影

図10 服部担風像Ⅱ現在弥富市個人邸に保存されている「蘭亭」  
にあり。筆者撮影

図11 日本謡（節録）パネルⅡ高文軍、王莉莉制作

図12 みそぎ橋Ⅱ稲葉昭二『郁達夫その青春と詩』東方書店、  
一九八二年四月

図13 担風書翰Ⅱ東洋学文献センター叢刊第18輯『郁達夫資料  
補篇（上）』東京大学東洋文化研究所付属東洋学文献セン  
ター、昭和四八年三月

図14 担風絵と詩Ⅱ中国郁達夫研究会より

〔附記〕本講演録は、二〇一五年八月一日中部地区中文交流会  
及び十月二十五日国際言語文化研究科主催講演会における講  
演をもとにしたものである。